

一般演題

1. 急性期病院における訪問摂食嚥下リハビリテーションの取り組み

Dysphagia rehabilitation of visiting dental treatment in acute hospital

○玉田 泰嗣、千葉 俊美*、城 茂治**、
近藤 尚知

岩手医科大学歯学部補綴・インプラント学講座補綴・インプラント学分野、岩手医科大学歯学部口腔医学講座関連医学分野*、岩手医科大学歯学部補綴・インプラント学講座摂食嚥下口腔リハビリテーション学分野**

目的：訪問診療における摂食嚥下リハビリテーションの問題点を明らかにする。

方法：平成 28 年 4 月から平成 29 年 2 月に於いて、外部の急性期病院において、経口摂取開始を検討している高齢入院患者を対象に、月に一度のペースで嚥下内視鏡検査を含めた摂食嚥下リハビリテーションを行った。

結果：11 回の訪問診療において、計 16 名の患者に対して嚥下内視鏡検査を含めた摂食嚥下リハビリテーションを行った。摂食嚥下能力と栄養摂取法の乖離は、約半数に認められた。また、全ての患者で間接訓練が必要であった。

考察：摂食嚥下障害に対する医療の歴史は短く、普遍化していないため、超高齢社会においても多くの医療関係者が対応に苦慮しているのが実情である。岩手県においても摂食嚥下障害に対する精密検査である嚥下内視鏡検査を実施しているのは 4 施設のみである¹⁾。一方、年代別の歯科受診率では、75 歳をピークに高齢になるほど受診率が低下していることから、摂食嚥下リハビリテーションを必要とする後期高齢者の多くが、通院できない状況であることが予想される。また、要介護となる原因疾患の多くが、摂食嚥下障害の原因となるため、介護施設では、摂食嚥下障害をもつ入居者が多いことが予想される。これらより、今後は、病院だけでなく介護施設等への訪問歯科診療も行う必要がある。結論：効果的な摂食嚥下リハビリテーションを

行うには、週に 1 度程度の再評価を必要とするため、訪問頻度を増やす必要がある。教育面からは、訪問施設数の確保が急務である。

1) 厚生労働科学研究委託費長寿・障害総合研究事業 摂食嚥下関連医療資源マップ

大学院歯学研究科第 3 学年研究発表会

1. 歯科材料からの微量溶出成分が間葉系幹細胞の骨芽細胞分化に与える影響

Water-soluble factors eluate from surface pre-reacted glass-ionomer promote osteoblastic differentiation of human mesenchymal stem cells

○根本 章、帖佐 直幸*、客本 齊子*、
加茂 政晴*、石崎 明*、野田 守

岩手医科大学歯学部歯科保存学講座う蝕治療学分野、岩手医科大学学生化学講座細胞情報科学分野*

背景・目的：従来、歯科保存学的治療ではグラスアイオノマーセメント、カルボキシレートセメントなどの各種セメントやコンポジットレジンが用いられてきている。近年、これらに酸反応性フルオロアルミノシリケートガラス (S-PRG) フィラーを添加した材料が開発・使用されている。

S-PRG フィラーは、フルオロアルミノシリケートガラスを粉砕し熱加工後、ポリアクリル酸による表面処理を行い、ガラス表面に安定なグラスアイオノマー相を形成させたものであり、アルミニウム (Al)、ホウ素 (B)、フッ素 (F)、ナトリウム (Na)、ケイ素 (Si)、ストロンチウム (Sr) などの元素を徐放する能力を有する。S-PRG フィラーは、二次齲蝕の抑制に効果があるとされているが、その生体親和性については不明な点が多い。そのため本研究では、S-PRG フィラーから放出されるイオンをはじめとした複数の微量可溶成分が細胞に与える影響について検討を行う。特に、細胞の増殖・分化能力への影響を明らかにすることで新規の機能性材料の開発や治療法開発のため基盤を分子生物学的側面から確立することを目的とする。

方法：